

大槻国語教育学に学ぶ

言語教育領域 I

—特に話し言葉を含む—
佐賀大学 白石 寿文

はじめに

こうした論文で情緒的な文体はふさわしくないが、敢えて私は、思いを込めて「大槻さん」とお呼びする。

昭和33年入学以来、公的にも私的にも学生生活のいろいろな面で、導いて下さり続け、最も身近で、最も尊敬している先輩「大槻さん」である。「大槻さん」のようになりたい。「私の願いであった。本論において、「大槻さん」とお呼びしたい。

誠実真摯の基本姿勢

大槻さんと

の公的共同研究は、「学習能率化のための基礎調査報告書（高校生の国語学習意識）」（64）が最初である。昭和40年7月のアンケート調査に向け、野地潤家先生のご指導を受けつつ、質問68項目選定と問いかけの文言の検討を重ねた。全国大学国語教育学会で「高校生の国語学習意識—目的・効用の面からみた—」（93）を報告、それを「国語科教育」第13集に発表させていた。12月に報告書をまとめた。この間、大槻さんから、誠実に真摯な研究者として

の基本姿勢を教えていただいた。

毎日公務を終えてからの午後六時過ぎてから、高等学校国語の授業を具体的に想定し、学習者である高校生は、その授業内容に如何様な意義や有効性を認めるかを仮説を設定しつつ検討した。アンケートの結果もパンチカードで分類し、傾向を読み取るべく二人で随分語り合った。否、語り合ったとはおこがましい。殆ど大槻さんが、問題を提起され、私が安易に回答し、先へ先へと進もうと上滑りな解釈を述べると、常に、大槻さんは、一つ一つそれを反復吟味され、私の短絡的指摘に複数の仮説や解釈を述べられる。決して一つの解釈で止めない。想定される限りの選択肢を設定し、アンケートに回答する高校生にとっても、答えることによって国語教育のあるべき方向について考える場になるよう、心を砕かれた。大槻さんが、想定可能な多様な広がりや、根源へ根源へとモノログ風につぶやかれ、それを私は感銘をもってひたすらメ

モを取った。録音機を利用すればよかったのであるが、二人とも機器に頼るのを潔しとしなかった。AからBへ、更に反Aを指定してBを再検討する……。幾度も「大槻さんの頭の中はどうなってるのだろう」と驚嘆した。どの事項にも、真摯で誠実な対し方を決して崩されることはなかった。

今一つ、大槻さんの基本姿勢の誠実真摯さに胸打たれたのは、大学紛争の最中である。大槻さんは、若き講師として、学生の提起した問題を真正面から受け止め、自分の問題として考え抜かれた。憔悴しきったお姿に幾度接したことだろう。笑顔が消え、話題は学問の在り方、展望のない大学の将来など、誠実に真摯に考えに考え続けられ、ご容貌までがすっかり変わられ、ご病気になるのではないかと、もしかして自殺する気をもんだ。大学の一人として、教育に携わる一人として、研究者として、人間として、常に誠実真摯に貫き通された。

自覚的省察と自己対話の方法論

大槻さんの「言語教育（話し言葉教育を含む）」（大槻国語教育学）には、自覚的省察と自己対話の方法として機能している。

77年9月の全国大学国語教育学会シンポ

ジウム「言語教育の今日的課題」でのご提案(198)は「はじめに、子どもの発達と言語教育、認識Ⅱ言語の教育としての言語教育、言語および言語使用についての自覚化」の柱で「無自覚的な国語の習得でよいのなら、国語教育などほとんど無用である。無自覚的な言語使用から自覚的な言語使用へとすすむためにこそ、国語教育(言語教育)は必要なのではなからうか。」とむすばれた。

96年6月の第21回関西集会シンポジウム「確かで豊かな国語力の育成(313)でも、「国語の授業は、この無意識的な言語活動を意識的な言語活動に転化する機会を与えるものでなければならぬであろう。そのためには、学習者自身が「かくありたい」と願う規範(モデル)を持てるようにしていく必要があるのではないか。もちろん規範(モデル)は外から押しつけるべきものではないが、すぐれた言語生活者に触れることは、学習者自身が自己のめざすべき規範(モデル)形成する機会となるに違いない。国語の教師は、その機会を提供する役割を担わなければならないであろう。」と国語教師の在り方に繋げて示唆された。

88年6月の第13回関西集会シンポジウム「国語科教育改革の方向を探る(265)では「外からの改革と内からの改革の接点を求めて」

「大量情報社会に対応できる人間を育成するという、いわば「外からの要請」は、主体的な言語活動主体を育てるといって、国語科教育内部分からの人間的発達の要求と結びつけることができるのではないか(例えば、説明文の読みの指導においては、まず①読みの構え(問いかけ)をつくる、②問いかけ、反応しつつ読む(対話過程としての読みを成立させる)、③自己の認識形成の道筋を捉え返す、といった授業過程が考えられる。」と「内なる対話」を指摘された。

98年6月の第23回西日本集会シンポジウム「確かで豊かな表現力の育成―音声表現を中心に―(329)で、「音声言語の指導―今、何が重要か―」として、「対話性」(人と人との言葉による働きかけ合い)こそ、もつとも重視されなければならない。」と根源を確認され、「音声言語力の向上は、自他の音声言語に対する省察とそこから導かれる言語自覚にまたなければならない。とかく無自覚になりがちな音声言語だけに、言語自覚を自覚にこれまでの主張を反復された。

絶えずご自身の在り方を問い直し、自己対話を重ね、自覚的な言語使用を自律された上で、の重いご提言である。

倫理的言語観の目標・内要論

「国語教育は、いま、ことばと人間と社会とのつながりを見すえた、根底的な問い直しが求められている。その際の目標は、当然にも人間性の回復・創造でなければなるまい。」と「月刊国語教育研究」の巻頭言(334)でルーズベルトとヒトラーの話振りを比較しつつ「根底からの国語教育の問い直しを」提言された。大槻国語教育学の目標には、この人間性を根源とした倫理的言語観が貫かれている。

95年6月、第20回関西集会「未来に生きる言語的実践力の育成」(310)のシンポジウムで、大槻さんは、「言葉を育て、人間を育てる」を基本にしつつ新しい時代に即応する国語科教育を」との提言で、不易な面を基本に、主要内容に人間を据えた「人間科」的な発想と学習者の関心・意欲を高め、パソコンなどの新しいメディア機器の道具的活用を国語科教育に」と提案された。

おわりに

本稿を書いていると、常に大槻さんの温かい眼差しに包まれている思いがする。大槻さんのことを考えると即座に一緒に仕事をしているような気持ちになるから不思議である。「最初に「国語教育原論」を書きたい」と34年前につぶやかれた。いっもご自分を後回しにされて今日に至っている。